

裁判で始まり、裁判で終わった政治家人生 -- フェルディナンド・マルコス (特集 亡命する政治指導者たち)

著者	木場 紗綾
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	209
ページ	28-32
発行年	2013-02
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00003776

裁判で始まり、 裁判で終わった政治家人生

—フェルディナンド・マルコス—

木場 紗綾

二〇年にわたってフィリピン共和国の第一〇代大統領を務めたフェルディナンド・マルコスは、一九八六年二月二十五日、家族と共に米国に亡命した。

マルコスは亡命後、不正蓄財および人権侵害で連邦裁判所に訴えられ、フィリピンの地を再び踏むことなく、八九年に亡くなった。他方、同様に不正蓄財の容疑で世界に名を轟かせたイメルダ夫人は、マルコスの死から二年後、支持者らの熱烈な声援に迎えられながらフィリピンに帰国し、その後には下院議員を務めている。二〇〇一年の選挙では、長男は上院議員に、夫人は下院議員に、そして長女は北イロコス州知事に立候補し、それぞれに当選を果たした。

●二月革命

マルコスが亡命を決意するに

たった契機は、一九八六年二月に起こった、「ピープル・パワー」、「エドサ革命」、「二月革命」、または「奇跡の無血革命」と呼ばれる一連の事件である。

マルコスは一九六五年の大統領選で初当選し、六九年に再選を果たすと、憲法の「三選禁止」条項を撤廃するために改憲会議を招集し、七二年九月には全土に戒厳令を布告、強権下で改憲を断行し、事実上は議会も廃止した。

マルコスは自らの政治スタイルを「新しい社会のため」と称し、スペイン・米国の両植民地時代よりフィリピンの政治経済を支配してきた伝統的エリート層の権益を解体する目的とし、当初は優秀なテクノクラートを配下に従えて革新的な政策を生み出したが、次第に「マルコス一族と「クローニー」と呼ばれるその取り巻きへの特

権の集中が批判されるようになった。

また戒厳令下においては、夜間外出および政治的集会は禁止され、メディアの報道も統制された。拉致、監禁、拷問といった人権侵害も深刻であった。体制に異を唱える政治家や学生活動家、労働組合員が次々と拘束された。マルコスの最大の政敵であったベニグノ・アキノ元上院議員（ニックネームはニノイ、現アキノ大統領の父）もその一人であった。

戒厳令下でも選挙は実施されていたが、ニノイ・アキノ率いる野党は議席をまったく獲得できず、大規模な選挙不正が横行していると考えられていた。戒厳令は一九八一年に解除されたが、政権に批判的な政治活動家たちへの弾圧は続いた。

民主化への契機は、ニノイの暗

殺であった。ニノイは七二年に陰謀罪で投獄されて死刑判決を受けたが、その後、健康上の理由から家族とともに米国に亡命していた。しかし彼は、フィリピンに戻って非暴力による改革を目指そうと考え、身の危険を承知で、八三年八月二一日、マニラ国際空港に到着し、機外に出るタラップを降りる瞬間に何者かに頭部を撃たれて即死したのである。

犯人とされる男性はその場で国軍に射殺されたが、マルコスの指しを受けた軍の組織的な陰謀ではないかとの内外からの批判が相次いだ。国民の不満は高まり、米国も、暴力の横行と政情の不安定化にも強い懸念を示すようになった。

こうした状況を受け、マルコスは八五年一月三日、自分が国民から支持されていることを世界に示すため、一年後に予定されている大統領選挙を繰り上げて実施することを決定した。マルコスの対抗馬として大統領に立候補したのは、ニノイの妻、コラソン・アキノ（ニックネームはコリー）であった。選挙は八六年二月七日に実施されたが、各地で暴力や不正が報告され、公式に発表された結果は

またもや「マルコス再選」であった。

その数日後、マルコスの忠臣であったはずのホワン・ポンセ・エンリレ国防長官とフィデル・ラモス参謀次長（のちの大統領）、および二人を支持する将校ら数百名が、この選挙結果を不当として国防省本部に立てこもり、マルコスに退陣を迫った。コリーは彼らをサポートする声明を出し、これを知った市民は、国防省に通じる幹線道路（通称エドサ）に詰めかけ、戦車や兵員輸送車を「人間の盾」でブロックした。最前線で戦車と対峙する修道女たち、銃口に手を差し伸べる人々の写真はあまりにも有名である。集会の様子を中継していたラジオ局が襲撃され、「マルコスはすでに出国した」などの誤報も流れるなか、二月二十四日、エンリレが暫定政府の樹立とコリー・アキノの大統領就任を宣言した。

●フィリピンと米国

なぜこの状況のもとでマルコスが米国に亡命したのかを説明するには、フィリピンと米国の関係について触れておく必要がある。

一八九八年、米西戦争後のパリ

条約によってスペインからフィリピンの統治権を手に入れた米国は、自治領・コモンウェルスとしてのフィリピンの一部独立を段階的に認めたものの、選挙制度や教育制度を通じて政治的な介入を続け、英語教育を徹底させるとともに、米国的価値観を植えつけてきた。

日本軍の占領と第二次世界大戦の終結を経た一九四六年にフィリピンは独立を果たすが、その後もフィリピンは、米国の庇護のもとで育てられてきた「民主主義のショーウィンドウ」であり、フィリピンの政治制度を安定的に維持していくこと、九二年までフィリピンに置かれていた二つの米軍基地を維持することは、米国にとつては、アジアにおける共産化の阻止や東南アジア地域の安全保障上の必須条件であり続けてきた。

こうした背景から、米国の歴代政権は、マルコス政権の独裁的な政治運営に肩入れしすぎるとの内外的批判を受けつつも、フィリピンへの軍事的・経済的援助を継続してきた。マルコスは米国と緊密な同盟関係を築き、ジョンソン、ニクソン、レーガンの各大統領とは非常に親密に交流していた。マ

ルコスが戒厳令を敷いたときでさえ、当時のニクソン政権は、共産勢力の拡大防止と治安維持の観点から歓迎したといわれている。

しかし八〇年代に入り、前記のようにフィリピン情勢が急激に不安定化すると、レーガンは強い懸念を示し、八五年には親しい共和党の上院議員ポール・ラクソルトを特使としてフィリピンに派遣している。このとき、ラクソルトはマルコスに親書を渡したといわれている。

マルコスが「繰り上げ選挙」を発表したのはその半年後であった。そして驚くべきことに、この歴史的な発表は、自国の記者会見ではなく、米国のABCテレビの衛星中継のインタビュウの場で行われた。マルコスは同インタビュウのなかで、自分は外国からの圧力に屈しているわけではないと強調したが、一国の強権的な大統領が、このような重大な決断をまず外国のメディアに向けて発表したこと、さらに、多くのフィリピン国民はその点についてはさほどの異論を唱えなかったこと（参考文献①）、これだけをとってみても、フィリピンと米国との複雑な関係がうかがえるであろう。

しかしながら、フィリピンは決して、米国に追従する外交ばかりを展開してきたわけではない。対米関係をアイデンティティの核とする政治家は少なく、歴代のほとんどのフィリピン大統領は、フィリピンの利益のためなら米国で、

なんでも利用できるものは利用する、という柔軟さを持ち合わせてきた。なかでもマルコスは、対米自立化を強く主張し、大統領就任の翌年の訪米時に、フィリピンにある米軍基地の期限を短縮する協定を締結した。六九年の再選直後には、ロムロ外務長官のもと、ベトナム戦争参戦国としては初めて、ベトナムから撤兵している。七〇年には米比関係の全面的見直しと再交渉が実施され、七五年には中国、七六年にはソビエト連邦、七六年にはベトナムと国交を樹立した。

●イメルダ・マルコスのエピソード

日本では、マルコスの圧政よりも、イメルダ・マルコス夫人に関するエピソードのほうが広く知られているかもしれない。マルコスを「秘密兵器」といわせしめ、世間では「鉄の蝶」と呼ばれてい



写真①: 亡命直前、マラカニアン宮殿に集まった支持者に対して、バルコニーから最後の演説をするマルコス。(AP通信社/アフロ)
http://newshopper.sulekha.com/ferdinand-marcos-imelda-marcos_photo_1719764.htm

たイメルダの半生は、日本を含む三十六カ国で放映された映画「イメルダ」(二〇〇三)に鮮やかに描かれている。

フィリピン中部のレイテ島で幼少期を過ごしたイメルダは、一八歳のときにレイテの首都タクロバンのミス・コンテストで優勝した美少女であった。二三歳のときにはマニラで「ミス・マニラ・コンテスト」に出場するが次点に終わり、主催者に不服を申し立てた事件は、イメルダの自信と押しつけたさを象徴する事件として語りつがれている。

この事件の翌年、イメルダは当時下院議員であったマルコスと、

出会ってわずか一日で結婚する。マルコスはこの間、一日一個のダイヤの指輪を贈ったといわれている。マルコスが大統領選に出馬すると、イメルダは選挙キャンペーンに同行して歌や踊りで夫を支えた。

イメルダは、国政や外交にも非常に積極的に介入していた。七五年にはマニラ首都圏知事、七八年には居住環境大臣にも就任し、当時から健康問題を抱えていたマルコスを支えた。彼女は、二〇年におよぶマルコス政権の中核であり続けてきた。

● 亡命を拒み続けたマルコス

さて、マルコス一家がフィリピンを離れたのは、コリー・アキノが大統領就任式を行った八六年二月二五日であった。コリーの就任を認めないマルコスは同日午前中、大統領府および大統領一家の住居のあるマラカニアン宮殿内で、独自に自らの大統領就任式を行った。マルコスの支持者らは宮殿を取り囲んでいたが、かつての側近らの姿はなく、マルコスはよいよ引き際が来たことを悟っていたと考えられる。この日の午後、マルコスはイメルダとともに宮殿

のバルコニーにあらわれ、中庭に集まった支持者らに向かって演説を行った(写真①)。これが、マルコスが国民にみせた最後の姿となった。

午後八時半、米軍のヘリコプターがマラカニアン宮殿から飛び立つのが目撃され、国民は、マルコスが大統領の座を退いたことを知った。このヘリコプターはルソン島中部の米軍基地クラークに降り立ち、米軍機に乗りかえてグアムへ飛び、ハワイに到着した。「マルコス出国」の報を受けたメディアはマラカニアン宮殿に殺到し、マルコス夫妻のプライベート・ルームを撮影し、食べかけの料理や梱包を諦めたらしい荷物の数々、キャピアの缶詰、のちに世界的に有名になった「イメルダの靴」や香水などの映像を全世界に発信した。

マルコスは最後まで米国への亡命を拒んでいたといわれている。前記のように彼は、両国の関係は「持ちつ持たれつ」であると考えており、一方的にフィリピンを「叱責」し「介入」するようなレーガン政権の態度に対してはきわめて批判的であった。レーガン政権は当初は内政干渉に慎重であった

が、与党共和党の保守派の間でマルコスに批判的な意見が強まるにつれ、レーガン政権はマルコス政権を見限り、亡命の前日には副報道官を通じて事実上コリーを支持する声明を発売した。そして米国は、マルコス一家をいかにスムーズに亡命させるかについて、マルコス家およびコリー・アキノと舞台裏で駆け引きを行っていた。

米国の干渉に批判的な姿勢を貫いてきたマルコスにとって、米国の描くシナリオどおりに亡命するなどということは耐えがたかったに違いない。彼は故郷の北イロコスに帰ることを希望したといわれている。しかし、アキノはこれに強く反対した。北イロコス州にはマルコスの親衛隊が控えており、もしもマルコスが帰郷すれば、新政権に反感を抱く人々による反乱が勃発する可能性があったからである。

最終的にマルコスに亡命を迫ったのは、シュルツ国務長官であったというのが定説である。米国大使館からの再三の接触を受けていたマルコスはレーガン大統領と直接に話をすることを望んでいたが、二五日未明、レーガンに代わって電話を受けたラクソルト上院議

員から「美しく退くべきだ」と言われ、覚悟を決めたといわれている。

ただし、彼がいつ亡命を決意したかについては諸説がある。イメルダあるいは次女のアイリーンが栄養剤と偽って医師に睡眠剤を注射させ、眠らせて連れ出したという説、北イロコス州のパワイ(Pagay) 町に逃げるのだと騙されてハワイに連れて行かれたという説(もつとも、これはフィリピン人お得意のジョークの類であるが)、もはや決断ができないほどに健康状態が悪かったとの説もある。マルコスは最後まで「自分こそがフィリピンを偉大な国家にできる指導者である」と信じていたが、その信念さえも病気のためであつた可能性がある。

●なぜ米国は介入したのか

このように、マルコスの亡命において米国が決定的な役割を果たしたことは事実であるが、同時に、一国の大統領の亡命を対米関係だけで説明するのはいささか乱暴である。そもそも、なぜ米国はマルコスに亡命を迫ったのか。そして、対米自立化を核としてきたマルコスがなぜ、最終的には米国の干渉

を「受け入れざるを得なかった」

のか。そこには、フィリピンにおける左派勢力の拡大が大きく関係している。六八年に再結成されたフィリピン共産党は、米国の介入およびマルコスの戒厳令に不満を抱く急速的な学生団体や労働団体を通じて急速に大衆基盤を拡大していた。そのなかには、六九年以降、組織的に選挙ポイコットの方針を取っているものもあつた。マルコスの統治能力が低下するなか、米国は、フィリピンが内戦状態に突入し、さらには、一時的にであつても左派政権が成立してしまうという「最悪のシナリオ」を恐れていた(参考文献①)。東南アジアの反共の皆であつたはずのフィリピンにおける左派勢力の阻止こそが、レーガン政権による介入の大きな要因であつたと考えられる。

●裁判で始まった政治家人生

ところで、ウェブサイト「世界人物事典(Encyclopedia on World Biography)」のマルコスの項には、「マルコスの政治的キャリアは、一九三五年の殺人容疑で始まり、八三年のアキノ上院議員の殺害容疑で終わった」と記されてい

る。

実はマルコスは二歳のとき、一九三五年の議会選挙において北イロコスでマルコスの父親を破って当選を果たしたフリオ・ナランダサン下院議員の殺人容疑で拘束され、有罪判決を受けている。「米国の庇護」のもとで実施された選挙において当選した議員が襲撃されるという、フィリピンにとつても米国にとつても不名誉なこの事件は、内外からの注目を集めるにじゅうぶんであつたが、容疑者が被害者の政敵の息子であり、さらに、名門フィリピン大学法学部随一の優等生とあつては、フィリピン中がマルコス青年の裁判を見守らないわけにはいかなかった。

マルコスは仮釈放



写真③：2010年選挙のポスター。イメルダはファースト・レディ時代の写真を使用している。(2010年4月、北イロコス州にて筆者撮影)



写真②：2010年選挙の看板。長男のボンボンの上院議員、イメルダは下院議員、長女のアイミーは州知事に立候補し、全員が当選した。(2010年4月、北イロコス州バタックにて筆者撮影)

中の身でありながら大学を首席で卒業し、自らの起訴を指示したケソン大統領から卒業証書を授与され、科目平均九八点という歴代最高記録で司法試験に合格した。この記録はいまだに塗り替えられていない。さらにマルコス最高裁では自分自身のための弁明を行い、無罪判決を勝ち取った(参考文献①)。マルコスの無罪判決は限りなくグレーであったとされており、当時の最高裁判事は「マルコスの才能を無駄にしたくなかったため」にこの判決をしたとの説もあるが(参考文献③)、才能あふれるマルコス青年は、無罪判決の翌日に最高裁に戻り、最高裁判事の前で、弁護士となるための宣誓を行った。

マルコスの政治家人生は、このようにフィリピン全土からの熱い注目を浴びて始まった。従来のフィリピンを支配していた「家柄」や「財力」ではなく、純粹に「能力」のみで裁判を争ったマルコスは、国民の同情と共感をひきつけた(参考文献②)。

その後、マルコスは一九四九年から一九五九年までの一〇年間下院議員を務め、五九年から六五年まで上院議長を務め、大統領に就

任した。「殺人事件の被疑者」としての経歴が、彼の強固な政治的基盤の一部を成していたことを考えると、のちの彼の強権的な統治手法や、「ピープル・パワー」に直面しても最後まで大統領職を退かなかった「粘り腰」への見方も変わってくるかもしれない。

●その後のマルコス一家

マルコスは帰国を熱望していたが、大統領在職中から懸念されていた健康状況の悪化によりそれも叶わず、一九八九年九月にハワイで死去した。イメルダは米国連邦地裁に起訴されていたが、九〇年七月二日には証拠不十分で無実判決を受け、九一年一二月に、フィリピンに帰国した。空港には「アイ・ラブ・イメルダ」と叫ぶ支持者らが集まっていた。

イメルダは九五年には出身地レイテから下院議員に立候補して当選した。二〇〇一年にフィリピン国内において不正蓄財の容疑で逮捕されたが、保釈金によって自由の身になり、ファースト・レディ時代にもっとも力を入れた文化・芸術の推進活動に力を入れているほか、二〇〇六年には「イメルダ・ブランド」も立ち上げている。

マルコス政権下で北イロコス州の知事を務めていた長男のフェルディナンド・マルコス二世(ニックネームはボンボン)も、亡命先の米国からの帰国後はさっそく同州から下院議員に選出され、州知事にも返り咲いたのち、現在は上院議員を務めている。能弁で知られる長女のアイミー・マルコスも、メディアや映画界での活躍を経て下院議員を務め、現在は北イロコス州知事を務めている。

興味深いのは、イメルダ、ボンボン、アイミーの三名が揃って当選した二〇一〇年選挙では、マルコス一家は、大統領選に出馬していたビリヤール候補の陣営に参加し、かつてマルコス政権が徹底的に弾圧した左派政党とも連合を組んだことである。下院議員や州知事はマルコスの故郷である小選挙区からの選出であるが、ボンボンが一二名中七位で見事に当選を果たした上院は全国区からの選出であることを考えると、フィリピン国民は、不正蓄財と人権侵害をきわめたマルコス一家を「赦す」どころか受け入れ、支持し続けていることがうかがえる。かつて、「被告」でありながらもその類なき能力で裁判に勝利したマルコスに深

い共鳴が寄せられたように、フィリピンの人々は、若いボンボンの弁舌やアイミーの饒舌さ、マルコスが果たせなかった政治改革への憧憬をみているのであろうか。

(きば さや/神戸大学大学院国際協力科学研究員)

《参考文献》

① 國安正昭「一九九六」『フィリピン市民革命の真相』日本地域社会研究所。

② Christopher N. Magno 2001. Crime as Political Capital in the Philippines. Ph.D. Dissertation, Department of Criminal Justice, Indiana University.

③ Hartzell Spence 1964. For Every Tear a Victory: the Story of Ferdinand E. Marcos, McGraw-Hill, New York.